

COVER STORY



福岡伸一さん

生物学者。ロックフェラー大学客員教授。青山学院大学教授。京都大学卒。2007年に発表した『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)でサントリー学芸賞および新書大賞を受賞。現在、雑誌『AERA』、『週刊文春』など4誌に連載を持つ。



福岡さんの著作の一部。最新刊は中央の『動的平衡ダイアローグ』(木楽舎)。

イーストリバー沿い、マンハッタン区の66ストリートとヨークアベニューの角に正門を構えるロックフェラーライバード。生物学・医学分野の大学院生が通い、かつて野口英世が研究生活を送った名門大学院大学だ。

生物学者で、青山学院大学の教授の福岡伸一さん(54)は、勤続10年の職員に付与されるサバティカル(使途に制限がない職務を離れた長期休暇)を利用して来米。現在、ロックフェラーライバードに客員教授として

福岡さんが同大に所属するのはこれが2回目。1980年代後半、駆け出し博士研究員(ポスドク)として、日夜研究に明け暮れる日々を送っていた。当時の年収は2万ドル。ルームメートと暮らすアパートの家賃を払つたら、残りはほとんどない。しかし、誰からも邪魔をされずに自分の研究に没頭できた人生

その後、自称「フェルメールおたく」となり、科学的観点から分析したフェルメールの本を出版したり、展覧会を企画したりするようになる。そのおたくぶりは日本国外でも知られ、フェルメールの代表作『真珠

「生命とは何か」がテーマです
ロックフェラー大学客員教授 福岡伸一さん
籍を置いている。

駆け出しの研究者時代

最良の時期だったと振り返る。当時、アパートから大学まで歩いていたという福岡さん。毎日同じ道ではつまらないので、碁盤の目の街をあみだくじのようにいろいろな道順で歩いているうちに、美術館のフリック・コレクションを発見。門外不出のフェルメールの名画を見てとりこになった。

最近は作家として注目され、一般的な生物学者とは異なる方向性を打ち出した福岡さんにその真意を尋ねたところ、「生命とは何か」、「人は科学をどうとらえてきたのか」ということに関して、広い視野からどうえり直し、書籍にして発表する必要性を感じたのだ

が極端に細分化され、多くの科学者が何のために研究をしているのが分からなくなっていると指摘。一方、古代の学問では理系、文系など分化しておらず、科学も芸術も哲学も緒になつて「生命とは何か」という大きなテーマに取り組んでいた。その原点に今一度立ち戻つて、考えるべきだと強調する。

NYでの作家活動

ニューヨークで執筆活動をする利点は、最前線で活動躍する科学者たちの話を直接聞けること、また有名美術館にある名画を見ながら、その作品と科学との接点を研究できることだ

。わたしは生命の神秘に引かれたのは少年のころ、自然の中に秩序だった美しさを見たからです。自分が好きなことを好きであり続けるのは、生きる上で大切なこと。そしてそれを許してくれるのが、ニューヨーク

「2003年に完了したヒトゲノム計画で、ヒトのすべての遺伝子が解読されました。しかし、それで生命の神秘が解けたかといつたら、そんなことはなかつたんです」

最近は理系の研究分野

「わたしが生命の神秘に好きなことを好きであり続けるのは、生きる上で大切なこと。そしてそれを許してくれるのが、ニューヨーク